

夢のなかでの対話

——ヴァレリーとプラトン

岩 崎 允 胤

〈作者の弁〉

軽い罪のない小品「夢のなかでの対話」の作者は、思惟の重い確かさを求める一人の哲学の徒である。さて、彼は、あるとき、ヴァレリーについて文を書く必要に迫られて行き詰ったのである。なぜなら、彼の読んだ「イデー・フィクス」* は、ヴァレリーの特殊な一面を示すにすぎなからうし、これに加えて、それすらまだ半分までも読了していない。彼みずからのヴァレリー観は、実のところ、とても定まらないのである。日夜、困っているうち、夢のなかで、何の助けか、ヴァレリーと覚しき人物と、プラトンにまごうかたなき人物とが、対話してくれた。それで、この軽い罪のない短篇は、実は、此の世ならぬ世界で実際にあったことの、此の世へのレポートである⁽¹⁾。

* (後注) ヴァレリーのこの作品は、岩々の、やや大げさだが巉々たる海辺の果ての、コンクリート塊(港の外堡を保護するための)の上での、医者と「私」との奇妙きてれつな対話である。

俺が夢のなかで気がついてみると、二人の風采のよい男が話していた。一人は見るからに近代的な額をした、サロンそだちのパリジャンの風体であり、一人はギリシア彫刻にみるような典雅冷厳な哲学者の風貌であった。その対話のきれぎれの内容から——というのは、俺は眠っていたのだから、しばしば意識を失って舞台から降り、また顔を出すというしだいだったので——、どうも一方は、このごろ俺が読んでいる「イデー⁽²⁾・フィクス」とやらの手品を心得ている男らしく、どうやらヴァレリーらしい。いや、ヴァレリーの芝居かもしれん。それに、ヴァレリーはなかなか本音を出さぬ気取屋のようだし。しかし、そうとばかり思っていると、彼を誤ることになる。彼は案外本気かもしれんだ。他方は、善のアイデアを説いた、まぎれもない、アカデメイアの哲学者プラ

トンである。序でに、場所は不確か。歴史の流れから空間ばかりを抽象した霧のなかでのこと。照明は二人のまわりに明るい。

（意識の空白）

文学者　これは君をもじったのですぞ。

哲学者　近代的にだな。

文学者　もちろん、そうですね。わたしは要するに手品にしたんです。人間という自動機械というやつ。

哲学者　で、具体的にどんなことを書いたんだい。君は、この本で。

文学者　それはその、純粹自我の可能の、それが過度となった、幽霊を書いたんです。つまり、どこまでも可能を追いかけてながら、フィクスした、流転しないアイデア⁽³⁾とやらの思いにとりつかれて気の狂れた男を書いたんですな。君のおかげで、もう二十日も眠れない真面目な気の毒な男をね。

哲学者　わしのおかげで、だって？　すると哲学にのめりこんで煩悶したのかね。

文学者　（独白、否定するは肯定するなりか。なるほどね。哲学的形式^{フォルム}の問題か。奴さん、うまいことをいうな。）

いや、この男は、あなたを否定しているんですよ、哲学をね。つまり、この花形役者は、イデーなんて固定しないという。それで、固定観念^{イデー・フィクス}をこわす。刻々こわして、みるところ、かえって何やら極度の固定観念にとらわれているんですよ、この花形役者は。

（意識の空白）

文学者　精神のなかでは何も持続しないと思うね。イデーとは、変^{トランスフォルマション}形してゆく作用、その過程の信号ですよ。イデーとは、フォルム、すなわちエイダスの変わる信号ですよ。どうしてかということ、イデーとはつまり、作用である系統^{フォンクシオン}の、精神が、無注意^{システム}の状態^{システム}で、勝手な対象、変数 x 、いや

実物 x に、適応して生ずるものだと思いますね。要するに、 x が変わりゃあ、それに応じて異った新しいイデーが次々に出てくるんですよ。イデーは関数みたいなものです。

哲学者　それじゃ、精神なんて、主体のない機械みたいなものだね。

文学者　めっそうな、ことですよ。がちゃがちゃ、自動するんですから。主体なんてものはありませんよ。しかし、君も主体なんていうんですか。初耳はつみみですね。「アカデミーの辞引⁽⁴⁾」にさっそく載せなきゃいけませんね。

哲学者　表現はどうだっていい。主体、主体とこの頃やかましいにもかかわらず、一向に主体的でない近代の俗物どもより、あのソクラテスの方が、主体の意味を知っていたかもしれないのだから。

文学者　とにかく、機能フオンクシオン、すなわち作用⁽⁵⁾、可能性、可能的変容、——事情に適応して変わるんですよ。オルガン（器官）の、その……つまり、精神はオルガニコン、有機的なものでしょうね。でも、実体じゃないんです。実体などありませんから。不安定、不連続で、不規則で、得体の知れぬ「蠅」どもが、しつこく飛びまわるみたい⁽⁶⁾……その Z です。イメージはひょこひょこ飛んだり、とまったりしますが、そのどれとも限定されないコーラ（空間・場）ですよ、精神ってものは。そこに何でもがどたどたとやってくるんですよ。そして何でもとの、エレウシスの秘儀⁽⁷⁾の聖なる交合とやらによってイデーが生まれるんです。イデー y は、変数、いや変物 x の、自我 Z を場コーラとする関数フオンクシオンですね。イデーは「不定の数⁽⁸⁾」ですね、君のいうとおり。そうでしょ、お弟子のアリストテレスの伝えを、まともにわたしは受けていいでしょ。

哲学者　君の仕方じゃ、つべこべおしゃべりばかりで、何もつかまらんじゃないか、確かなことは何一つ。

文学者　しかし、これこそ、厳密至極へいたる道なんです。「科学的」で、エピステーメー⁽⁹⁾なんです。しかし、裏にも、ちゃんと裏もあるってことを注意してください。トランプにも、ひっくり返せる裏も用意しておかなければいけないと思うんです。なにせ、ものの表面には、その底の方があるんですから。坊主めくりみたい。次に何が出るか、興味津々ですね。

ところで、と、……厳密であるためには、とにかく、本当の意味で、モア（もっと）のオムニヴァランス⁽¹⁰⁾です。つまり、一般的に、次々と何でもがいつも妥当するんです。モア（もっと）とノン・モア（もっと、でない）、そしてまた、モア（もっと）、ということ⁽¹¹⁾についてです。そこで最も厳密なものに行き当たるんです。知性の建築師^{エウペリノス}⁽¹²⁾になるんです。これは、自信がありますよ。まあ、一緒に行きませんか。海辺の墓地の散策に⁽¹³⁾——？

（意識の空白）

文学者　あの男は、イデーはフィクスしない、というくせに、イデーにとりつかれて、抽象にはまって、いわゆる、すっかり「来^て」いるんですよ。苛立つだけだ。あの男は俺じゃないぜ、はっきり断っておくが——。

（意識の空白）

文学者　で、わたしは書いたんですよ。思想は、寄生虫で、がんこな虫だって、ね。意識は、どれでも可能であるのに、なまじっか、注意集中なんていう奴のために、どれでもうちの特定の奴が他をおしのけて、意識にひんぱんに大きな顔をして帰ってくるというわけなんです。意識はそいつを甘やかすんです。で、そいつは可愛がられて、ますます図に乗って根をはって、騒ぎはじめるんです。何ぶん、甘やかしちゃいけないんでしょうな。寄生虫になりますから。君だって、善のアイデアが、この世では、十回のうちせいぜい何回は当るっていう口^{くち}だということ、それも贅沢な話だということぐらい、知らなければいけませんよ。それは偏愛の極みっていうものなんだ。

（意識の空白）

哲学者　——それで君には、一向に行為の原理が出てきやしないじゃないか。やたらに賑やかで、頭の機械が、まるで、たえず、点滅装置みたいにチカチカしているばかりだ。目の前にボタンが無数にある人工密室にこもっている、あの孤独な運転台だ——。

（意識の空白）

哲学者　——それで、あの男はいつも身構えている。踏みださない。身構えているといっても、何か特定のものではなく、何でも身構えているわけだね。潜在的な、可能的な防禦ってわけだ。どんな可能性にたいしても身構えていて、防禦できるっていうわけだ。しかし、何でもの可能とは、何でもない可能なのだよ。結局、何でもないことじゃないか。メー・オン（何でもないもの）の実在なんて、知性の抽象だ。しかし、君が特定しないというその現実が、案外、君の抽象をうちやぶるかもしれないぜ。君は、何でもに用意できているつもりでいて、いつのまにか、用意していなかった現実が、君の背後を、君を支える下からうかがっているかもしれないぜ。もともとこの問題に方程式だか、関数だかをもってくることからして、無理なんだ。

（意識の空白）

文学者　君はなんと会話が下手だね。もっと活潑に、迅速に、しゃれて、語らなくちゃ駄目ですよ。頭が鈍いのか。大事なことは、イデーでなくて、速度だからね。速度の時代なんだ。それに、本気でないことも、ときに切札みたいに、自信たっぷり、さっと切るんですね。こう、すばやく。

哲学者　メフィストみたいだな、君は……。しかし、わしの対話は、知性のかけ合い問答ではない。サロンの華やかな舞台には、わしは向かない。モンマルトルやら、モンパルナスやらは……。パルナソスの山でなければ、わしには迷宮ものだ。わしの口はもっと重い。もっと重々しいんだ。わし

は静かに歩む。沈思する。思索する。静かな瞑想の歩みをわしは愛する。わしは、流れるものの中にあつて、真に有るものは有るという簡単な真実を言い切りたいのだ。

わしは、若い頃から、アクロポリスの南方をゆくイリッソスの流れの傍、プラタノスの涼しい木蔭で、ソクラテスに伴つて、あるときはまた、ひとりて哲理を思った。流れるイリッソスをみては、わしは、あるときは、ヘラクレイトスの神的な直観を思った。わしには、ディケー（正義）、ロゴスということの真実が、思いのなかにしだいに浮かびあがつて、これこそ実在であり、人々のいうオン（存在）などは、じつはメー・オン（非存在）、仮象にすぎないことを知つた。その日から、オンがまさにオンである、本当のオン（オントース・オン）を追い求めた。もし真理と学問とが存在するならば、たんなる流転のなかにではなく、そのなかに深くみえる高い次元の恒常的なものが、存在しなければならない、と思うようになったのだ⁽¹⁴⁾——。

文学者の姿はいつかもう消えていた。

老哲学者は、若き日を思い浮べて、ひとりそう語りながら、静かに舞台の後方に歩みを運んだ。足取りは重かつた、重々しかつた。

（意識の空白）

俺はこれしか覚えていない。目が覚めると、まだ時刻は早かつた。窓はうす明るんでいた。窓掛を引くと、東の空は美しくほんのりと赤かつた。庭の樹の高い梢が、濃く、夢みるように浮びあがつてみえた。俺はそれからゆうべの対話を思い出した。そして大急ぎで書きとめた。ちょっと意味のとれないところもあるかもしれない。話の煙に巻かれたのか、舞台の霧とやりに巻かれたのか、それはわからない。たしかに一方はどうもヴァレリーらしい。しかしどこまでが本物のヴァレリーか、おまけに、いつていることのどこまでが本音か、わからない。他方はまぎれもなくプラトンだ。俺はむろんプラトニストではない。

これは夢の話なのだから。しかし、あの最後の言葉と、あの重々しい静かな足どりは、今でも感動的に俺の脳裏にのこっている。

（一九四八年二月五日稿——中島健蔵講師〈東大〉に）

- (1) 〈作者の弁〉にあるように、本稿は、この〈弁〉をも含めて、ヴァレリーの「イデー・フィクス」の内容をだいたい勝手にもちった。ちょっといたずらっぽい、フィクションであるから、ヴァレリーの研究者からは多分お叱りを受けるのを重々察している。
- (2) ヴァレリーのいうイデー (idée)、英語アイディア (idea) は、プラトンもいうギリシア語のイデア (idea) からくる。
- (3) この台詞は、作品の終りの方にある。わたくしは、プラトンのイデアが、アリストテレスではエイダス (ラテン語訳してフォルマあるいはスペキエス)、つまり forme となることにかけている。
- (4) アカデミー・フランセーズ編の有名なフランス語辞典があって、ヴァレリーのテキストでは、わたくしがあとで言及する新語、オムニヴァランスがその辞典に載るとい話が出るので、ここでは、プラトンのたてた有名な学園、アカデメイア (今日の英、独、仏語などの用語アカデミーはここから由来する) を念頭にいれて、主体という語を、あんたの方のその辞引に早速載せなきゃいけないという、しゃれた話とした。なにもプラトンのアカデメイアに、そもそもそういう有名な辞引があったということではない。
- (5) フランス語の fonction (フオンクション) にも、機能、作用という意味と、関数という意味とがある。
- (6) 「イデー・フィクス」中の次の対話を参照。医者「きみは精神というものを蠅と見立てているんですね……あちこち飛びまわったり、とまったり、また飛びたったりする蠅のようだと……」 私「そう。いや、まったくその通りというんじゃないですが。とにかく、蠅の不安定性、——不連続性、——不規則性は、みごとに表現していますよ……」 医者「患者の精神をね」。
- (7) 古代ギリシアで秘儀といえば、数あるなかでも、アテナイの北西部にあるエレウシスのそれは有名。本稿では、聖なる秘儀というので、その枕にエレウシスが出ただけのことである。
- (8) アリストテレス『形而上学』などで伝えられるプラトン晩年のイデア論をふまえる。「大と小」あるいは「より大でもより小でもありうるもの」(プラトン『ピレボス』など)——つまりモア・オア・レス (more or less) ——という一方のヒュレー (質料) 的原理にたいし、これにでんと限定づける「一」という他方のエイダス (形相) 的原理があって、この両原理で具体的な事物を考えてゆく。この

「より大とより小」がプラトン晩年の説とされる「不定の二」であり、ここでわたくしはそれを「不定の数」と書いて、話に結びつけた。哲学論文ではないから。なお、古代ギリシアでは、一は数の単位であって数ではなく、数（自然数）はそれを単位として数えてゆき、二からはじまる。

- (9) 本当の認識・学問ということ。
- (10) オムニヴァランス (omnivalance) という新語。オムニは、すべてという意味のラテン語系接頭語（むろん、ラテン語の形容詞 *omnis*, -e からくる）、またヴァランスは、今日の仏語では、とくに化学用語で「原子価」の意味であるらしい。つまりオムニヴァランスはどんな原子価もとりうるということだろうが、ここはむろん直接に原子価のことをいったのではなく、もっと一般的な含意とされているように思われる。本稿末尾の付記であげた訳書の注では、以上のようにこの語の「原子価」との関連をのべ、オムニヴァランスを「全価可能性」と訳している。そうかもしれぬが、わたくしの考えでは、この説明は、すこしヴァランスという語の、「原子価」という意味の現代的使われ方にこだわりすぎているのではないか。ヴァランス (valence) は後期ラテン語の *valentia* からくるが、これは、古典ラテン語の *valere*（これからフランス語の *valoir* は出てくる）の現在分詞 *valens, entis* から出来た名詞である。それゆえ、ヴァレリーの造語は、「原子価」という意味をもつ *valence* に直結するというよりも、むしろこの語の上述の由来を顧慮して、もっと一般的な意味（つまり *valoir* 「価する」からの名詞形としての *valentia* のもつ意味）を付与されているのではなからうか。
- (11) モアについては注（8）を参照。
- (12) ヴァレリーは、「エウパリノス」という対話篇を書いている。そのさい、古代ギリシアの「建築師」をしらべて、彼は、エウパリノスという人名をみつけ、これを著作の標題とした。
- (13) 「イデー・フィクス」は、海辺での対話である。この点について、本文、〈作者の弁〉末尾の注*を参照。いっさいの固定したものを棄ててくる海辺の墓地。ちょっと寒々とする。
- (14) アリストテレス『形而上学』第一巻、第六章、その冒頭を参照。

〈付記〉上注のなかで、(4) (6) (10) (12) などで、ヴァレリー全集第三巻、築摩書房、一九六七年に負うところがある。なお、この注は、〈作者の弁〉末尾の注*とともに、1948年の執筆ではなく、最近の補足である。